HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウズベキスタン手工芸家支援の試み：日本における刺繍展示会とワークショップの報告
Author(s)	今堀, 恵美
Citation	日本中央アジア学会報, 20, 70-71
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.20.70
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98893
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	JB20_010imahori.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本中央アジア学会報　第20号（2024）pp. 70－71
DOI https://doi.org/10.14943/jacas.20.70

JACAS 年次大会 発表要旨

ウズベキスタン手工芸家支援の試み
── 日本における刺繍展示会とワークショップの報告 ──

今堀　恵美

現在ウズベキスタンではかつてないほど観光化が進み、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァといった都市では土産物としての手工芸品の需要が高まっている。その一方で廉価な手工芸品の輸入が広がり、地域で継承されてきたデザイン、費やされる技能、品質の差が売り上げに直結しにくい状況がある。

従来のウズベク工芸研究は作品を地域で表象させる語りが中心［Чепелевецкая 1961］だったが、特にこの10年間に各工芸分野で活躍する手工芸家たちを実名で網羅的に取り上げ、作品の特徴や経歴、展示会（とくに国際展示会）への出品、受賞歴を紹介する研究［Рахмова ほか 2019, Бинафша 2021 など］が増加した。これらは現在活躍する手工芸家を表彰し、廉価な制作だけではなく、次世代につながる工芸制作や観光業を支える人材育成のロールモデルとし、手工芸家の作品で差異化を図る作家性確立への試みともいえる。作家性の確立は作品のブランド化を可能にし、質の高い制作活動をする工芸家のエンパワーメントにもつながるだろう。

質の高い制作を続ける手工芸家の活動の幅を広げる試みとして、2020年にウズベキスタン大統領ミルジヨエフから友好賞を受賞した刺繍作家ズフロ・オブロベルディエヴァを日本に招聘し、2024年2月ウズベク刺繍の展示会および刺繍教室を実施した。本報告ではこの展示会を通した手工芸支援の試みを考察した。展示会開催の方針として、ズフロ・オブロベルディエヴァという現代の個人作家の作品紹介に注力した。また制作は単なるアート（自己表現）ではなく、現地の女性刺繍作家が事業のイニシアティブをもち、事業によって村落部の下請け女性に収益がある点も明示した。

展示会には壁掛け（スザニ）や目隠しなど40点以上の作品を展示し、5日間で560名を超える来場者があり、刺繍教室では74名の参加者があった。ただし本展示会は科研費の研究成果を還元するという性質から展示会場内での販売活動は自粛することになった。

展示会場で実施した来場者アンケートの結果について報告した。アンケート回答者には大別して大学生および40代から60代女性という2種類のグループが見られた。回答者は両グループともウズベク刺繍家の作品を高く評価し、購入意欲も高い。とくに40代から60代女性グループにとっては「滅多に日本で見られない、ウズベキスタンで有名な刺繍家の作品を見る機会」と認識され、「現地に行っても（土産物屋などで）本物を見られない作品」、「日本で習う機会のない

©IMAHORI Emi 2024
(Licensed under CC BY 4.0)

刺繍ステッチ」が強い関心をひいた。一方で、大学生にとっては遠い世界だった中央アジアの文化、ウズベク刺繍、作家本人を目の当たりにすることが関心の幅を広げる契機となっていた。アンケートではウズベク刺繍家の作品が今後日本で販路を拡大させる可能性について問うた。回答では展示品のような装飾性の高い作品の価値は認めつつも、実際に手に取る品として実用性や普段使い小物への応用の可能性が指摘された。

上記からウズベキスタンの手工芸家を支援し、パートナーシップを構築する試みとしての展示、ワークショップ、SNS の可能性として以下の 3 点を指摘した。

1. 展示や手工芸を実際に体験する刺繍教室は日本人のウズベク手工芸に対する見方を変えることに一定程度の役割を果たしている。一方でウズベク工芸家自身も、直接中央アジアに関心のある日本人に触れ、新たなネットワークを形成した。

2. 展示会広報に SNS での情報伝達が大きな威力を発揮した。中央アジアに関心のある人々に SNS 上のインフルエンサーから直接情報が届き、展示会へ足を運ぶ契機となった。SNS や翻訳サイトといった新たなツールが刺繍家に直接日本人とのコミュニケーションを可能にし、日本へ新たな販路を拡大させる可能性を提供した。

3. ウズベク刺繍家たちは日本での展示に参加しても常に母国の家族や知人とスマホでつながっていた。常に彼らに相談し、時に交渉しつつ、新たな販路拡大を決めていた。

今回の展示会を通じて以下の 3 点を考慮する必要性を痛感した。

1. 助成金使用のルールや大学での学務など研究者は一定の行動規制があり、単独でパートナーシップを構築するのは限界がある。

2. 人類学者などの研究者は現地の人たちと長年に亘って築いてきた信頼関係を母国（日本）でも継続し、中央アジアの工芸に関心のある日本人につなげるコーディネーターとしての役割が期待される。

3. 中立性、客観性確保のために活動を制限するのではなく、彼らとともに新たな世界をデザインし、実現させるためにアイディアを提供し、多くの協力者を巻き込んで行動することが必要とされる。

今回の結果をウズベク刺繍家と共に検討し、さらなる制作活動の発展に貢献していきたい。

参考文献

Бинафша, Н. 2021. Ўзбекистон Амалий Санъати. Китоб Альбом. Тошкент: «San’at» журнал нашриёти.

Раҳмонова, М., Ҳамроев, А. 2019. Бухоро Ҳунармандчилиги Дурдоналари. Тошкент: «O‘zbekistan» НМИУ.

Чепелевецкая, Г. А. 1961. Ўзбекистон Сўзанаси. Тошкент: ЎзССР Давлат Бадиий Адабиёт Нашриёти.

（東海大学文化社会学部アジア学科）